松本市文化財調査報告No. 25

松本市惣社宮北遺跡
緊急発掘調査報告書

1982. 3

松本市教育委員会

凡　　例

○本書は昭和56年12月12日より12月27日まで16日間にわたって行われた宮北遺跡の調査報告書である。

○本書には宮北遺跡の東方300m余にある車塚の立合調査報告も合せて付した。

○本書の執筆は社会教育課　神沢昌二郎が行い、車塚については、倉科明正、三村　肇氏の報告である。

○本書執筆にあたって陶磁器については市内浅間在住の陶芸家篠田義一氏に、瓦については惣社、元製陶業原喜和次氏にご教示をいただいた。

目　　次

第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調　査　日　誌 …… 1

第２章　遺 跡 の 環 境 …… 3
　第１節　遺跡の自然環境 …… 3
　第２節　遺跡の歴史的環境 …… 4

第３章　遺 構 、 遺 物 …… 6

第４章　結　　語 …… 18

あ と が き …… 20

付．惣社車塚立合調査報告 …… 21

挿 図 目 次

第 1 図　宮北遺跡位置および周辺遺跡図 …… 5
第 2 図　宮北遺跡調査地点全体図 …… 7
第 3 図　宮北遺跡A地区実測図（1：60）および出土遺物実測図（1：3） …… 8
第 4 図　宮北遺跡A地区礫列推定図（1：150） …… 9
第 5 図　宮北遺跡B地区全体図、断面図（1：60） …… 11
第 6 図　宮北遺跡B地区出土遺物（1：3） …… 12
第 7 図　宮北遺跡C地区礫列遺構平面図（1：300） …… 13
第 8 図　宮北遺跡C－1、C－2グリット平面図、断面図（1：60） …… 14
第 9 図　宮北遺跡C－4、C－5グリット平面図、断面図（1：60）および
出土遺物実測図（1：3） …… 15
第10図　宮北遺跡D地区平面図、断面図（1：60）およびD地区
出土遺物、遺跡周辺採集遺物実測図（1：3） …… 17

車　塚

第 1 図　惣社車塚実測図（1：100）および切図（1：600） …… 22

図 版 目 次

図版 1　発掘調査箇所全景（北西より） …… 25
図版 2　発掘調査箇所全景（南西より） …… 26
図版 3　A地区礫列およびその断面 …… 27
図版 4　B地区集石および遺物出土状況 …… 28
図版 5　C地区礫列 …… 29
図版 6　C－5グリット礫列及び断面 …… 30
図版 7　D地区遺物出土状況 …… 31
図版 8　A、B、C地区出土遺物 …… 32
図版 9　D地区出土遺物および表採遺物 …… 33

第1章　発掘調査の経過

第1節　調査に至る経過

昭和55年より57年度にかけて、惣社地区内に市道開発計画があり、市道の一部が宮北遺跡に隣接するため、発掘調査をし記録保存をはかることとした。また、市道予定地は信濃国府推定地の一つでもある惣社伊和神社西方200m程に位置しているため、松本史談会より国府推定地解明のためにも調査を行うよう要望があった。

市では9月補正予算に50万円を計上し、道路敷地および隣接地を約100m²にわたって発掘調査をすることとし、調査は松本市教育委員会が直営で行うこととした。

着手に先立って、9月より数回にわたって現地調査を行い、最終的には10月に地主田中長治氏、原良一氏、市建設部竹川俊文技師、市教育委員会神沢昌二郎、百瀬　清主事らにて発掘地点を決定した。

発掘調査には社会教育課神沢昌二郎が担当者となり、中信考古学会の大久保知巳・西沢寿晃・三村肇・山越正義・横田作重・熊谷康治氏の助力をいただき、調査補助員としてあがた考古会の瀬川長広・大出六郎・吉沢酉巳・上野正春氏の他に滝沢智恵子・山崎治男氏のご協力を願い、また地質部門については太田守夫氏にお願いした。

第2節　調　査　日　誌

○昭和56年12月12日（土）晴

地主田中長治氏立ち会いのもとにA地区発掘地点決定。他にB～Dまでグリット設定する。基本的には、A地区4×5m、B地区2×10m、C地区3×3m×5ケ所、D地区3×4mの計97m²を発掘することとする。

A・D地区は道路敷地および予定地で、B・C地区は道路隣接地である。

午後よりC－2，5グリットを掘るが、C－5では－30cmでV字状の礫が検出される。

○12月13日（日）晴

参加者が多いため、A地区を掘る。4×5mのうち、北側の方には－20cm余りで礫があり、葡萄の根が入りこんでいる。遺物は須恵器等の小破片が20片程検出される。中心よりやや西側に巾30cm、長さ3mあまりの南北に走る礫の列があり、ボーリングステッキによる調査では更に南へ6mあまり続いている模様である。他に西側にも南北に走る礫列がボーリングによって確認された。他にコの字状に浅い掘り込みがあった。

○ 12月15日（火） 晴

B地区を掘る。－25cmで高坏出土。その下－40cmの黒色土層中に8～30cm大の礫が散見、－50cmで弥生後期の壺形土器口縁部出土。

全般に－50cm位でこぶし大の礫がある。

別班で全体測量を行う。

○ 12月16日（水） 晴

B地区中央部で黒色土の僅かな落込みを感じるが、住居址としての範囲ははっきりしない。口縁部作図のうえとりあげると、下部にはまだ土器が続く。

C地区2グリットを掘る。浅い径20cmあまりの小穴が2本でる。

○ 12月17日（木） 晴

C地区4グリット掘る。土師器片出土。－80cmあたりより礫が出る。

三角点より水平値をおしだす。

○ 12月18日（金） 晴

AT, C－5清掃。C－1掘り下げ、－40cmで礫が出る。他にBTの南側集石部分掘り出し、測図する。

SBCTV、信毎、読売、市民タイムス取材に来訪。

○ 12月19日（土） 曇・小雨

C－1掘り下げ。南側のこぶし大礫層は厚い。

C－2，4，5断面図、C－5礫列測図。

D地区掘りはじめる。打製石斧出土。

○ 12月20日（日） 雪・晴

B地区集石たち切り。

C－5礫列実測、その南側を部分的に掘り南限をさぐる。

D地区掘り下げ。－70cmあまりで径10～20cmの礫散見。土師器片出土。

昼休みに原儀兵氏宅にて周辺古図拝見。

○ 12月21日（月） 晴

C－5実測終了。礫列の南限はV字状分岐点より南へ15mの地点である。

V字状溝たち切り測図をとる。

○ 12月22日（火） 晴

C－4およびD地区測図。

○ 12月23日（水） 薄曇

B地区平面、断面図とり。

C－1，2，4測図。

C地区北側の礫列をさがす。北端はV字状分岐点より12m程延びている。

○ 12月24日（木）晴

太田守夫氏により、地質岩石調査、午後松本史談会見学。

A地区平面・断面図、C－1平面図をとる。

○ 12月25日（金）

テント撤収、北側道路と平行して、礫列がある。

○ 12月26日（土）晴

C地区平板測量。あと午後より小型重機により埋土。

○ 12月27日（日）晴

埋土、午前中かかって完了。

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の自然環境

惣社地区は松本市の東部にあり、標高は600m余で、薄川の扇状地で畑地と水田地帯にまたがる。地形は僅かに西傾する。その北方には湯川が天井川となって曲流し、その北側は女鳥羽川の堆積物により形成されている。そのため遺跡周辺は薄川の氾濫により美ケ原安山岩や石英閃緑岩と、女鳥羽川上流の三才山方面の玢岩やガラス質安山岩などが混在し、耕土も20～30cmと浅い場所が多いが、部分的には1m近くのところもある。

水便は悪く、南側の大街道では、井戸数は5本しかなく、その深さも10～11mあまりで、冬期間は渇水することもあったという。

遺跡の北側には池があり古老の話では井戸をつくまでは湧水池であったということであるが、昨年湿地状態だったところを埋めたてて宅地化してしまっている。この池の脇には灌漑用の井戸があり、周辺の田用水として利用されており、その後この井戸は上水道に利用されている。上水道用井戸は今回発掘地点の南側にもある。

伊和神社横には里山辺から流れる小水路があり、これが遺跡の南側を西下して清水堰に達している。一方北川の湯川上流より田用水をとってあり、遺跡西側の水田をうるおしている。しかし今回発掘調査地点は現在水田耕作をして居ず、休耕田と畑および従来からの畑である。これら畑でも旱魃の折には蕎麦を作ったこともあるという。

第 2 節　遺跡の歴史的環境

松本市内には400に近い遺跡があるが、今回調査の惣社地区周辺にも多くの遺跡がある。ここでは薄川左岸より女鳥羽川右岸までの、いわゆる東山方面を主としてみてゆきたい。

● 縄 文 時 代

この時代の遺跡は東山山麓から市街地に西下するにしたがって数が少くなってくるが、山麓遺跡としては南より弘法山西麓の平畑遺跡では石鏃が、千鹿頭社入口北のブドー園では土師器、須恵器、灰釉陶器片とともに縄文土器片、打製石斧が採集され、林城山西麓の林山越遺跡からは石棒が採集されている。平地では薄川左岸で神田集落内と筑摩東遺跡、筑摩小学校周辺で土器片が採集されている。川を越えて右岸では針塚周辺では前期諸磯Cおよび中期土器が出土し、下って四谷遺跡からは加曾利E式に属する完形土器が、あがた遺跡に接する埋橋では凹石と大形石棒が発見されている。更に北へ行くと、今回調査の宮北遺跡で打製石斧と石鏃、塚田遺跡からは曾利Ⅲ～Ⅳ式に相当する完形土器が、下って女鳥羽川河床からは晩期を主とする土器、土偶、石器等が発掘調査により検出されている。大村遺跡群の中では、大村神社南側で後晩期の遺物が出土している。

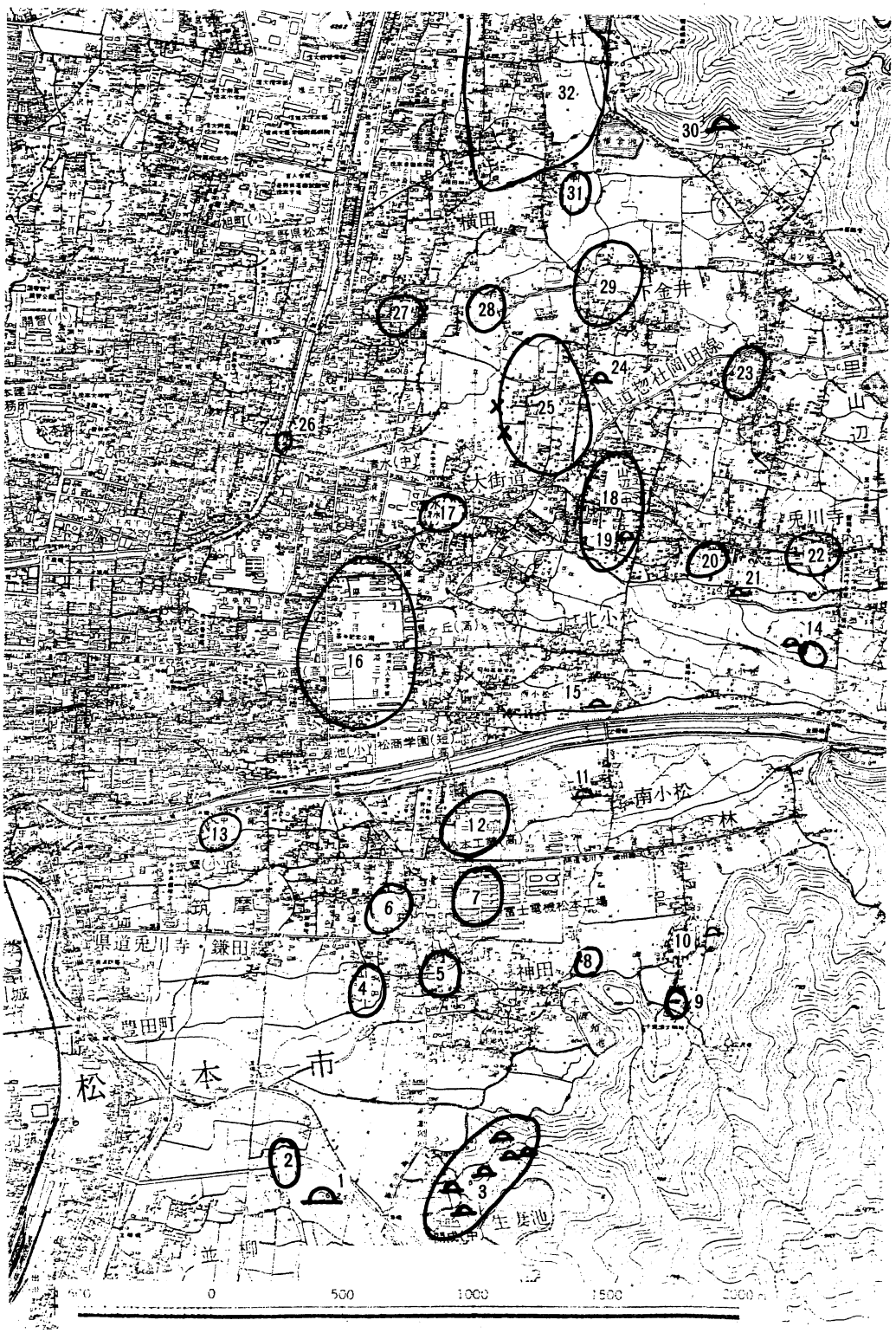
● 弥 生 時 代

この時代はほとんど土師期の遺跡と複合しており、薄川左岸では筑摩遺跡、富士電機遺跡、神田遺跡、松本工業高校遺跡で土師器とともに僅かではあるが百瀬式から箱清水式に至る遺物が出土しており、右岸のあがた遺跡では中期から後期にわたる住居址が二軒発掘され、そのうち一軒では石器工房ともみられる石器群が検出された。上流に上って針塚では再葬墓を中心とする墓壙より多数の土器棺が57年3月に発掘され、過去の出土遺物と合わせると10数点を越えるが、時期的には前期または中期初頭の条痕文、沈線文の壺が主である。今回発掘の宮北遺跡からは簾状文の壺が出土している。

● 古 墳 時 代

南に国史跡の指定をうけている前方後方墳の弘法山古墳がある。昭和49年の発掘調査により、礫槨内より半三角縁四獣文鏡、ガラス小玉、鉄斧、鉄剣、銅鏃、鉄鏃等のほか、土師器の壺、高坏、器台、手焙形土器が出土しており、その東方棺護山古墳群内の、中山36号墳では粘土槨で、半三角縁上方作竟獣帯鏡、鉄鏃、土師器が出土し、続く開成中学校々地よりも鉄剣、直刀、鉄鏃、有孔砥石が出土している。北の林城山西麓の里山辺9号墳（御符）では直刀が出土、薄川の氾濫原にある里山辺10号墳（巾上）では直刀、轡、管玉、須恵器が出土しており、56年12月の圃場整備に伴う立合調査では、水田面下70cmで裾石とともに土師、須恵器片が出土した。

右岸に渡ってあがた遺跡で示した範囲内では、松商学園高校敷地より半欠の瑞花双鳥八稜鏡が、あがたの森内に県塚第1号墳、蚕糸公園東桑畑内に県塚第2号墳がある。四谷遺跡に隣接して、清水小



×印　今回発掘地点　1.弘法山古墳　2.平畑遺跡　3.棺護山古墳群　4.三才遺跡　5.神田遺跡　6.筑摩東遺跡　7.富士電機遺跡　8.千鹿頭北遺跡　9.林山越遺跡　10.里山辺9号墳　11.里山辺10号墳　12.松本工業高校遺跡　13.筑摩遺跡　14.針塚遺跡、針塚古墳　15.里山辺11号墳　16.あがた遺跡　17.四谷遺跡　18.下原遺跡　19.里山辺1号墳　20.荒町遺跡　21.里山辺2号墳　22.兎川寺遺跡　23.荒井遺跡　24.車塚古墳　25.宮北遺跡　26.女鳥羽川遺跡　27.元屋敷遺跡　28.横田遺跡　29.惣社北遺跡　30.里山辺5号墳　31.塚田遺跡　32.大村遺跡群

第1図　宮北遺跡および周辺遺跡図

学校西側墳丘より小形八稜鏡と灰釉の壺、坏が発見されている。上流に戻って里山辺11号墳（北河原屋敷）、同4号墳（針塚）、同2号墳（大塚）、同1号墳（荒町）等積石塚が存在し、今回付記した車塚および湯の原寄りの山腹に里山辺5号墳（オボケ）の円墳等多くの古墳がある。

● 奈良、平安時代

この時期になると、現在の住宅地のほとんどが遺跡に接する程、濃密である。南からは三才・神田・筑摩・富士電機・松本工業高校の各遺跡より土師器・灰釉陶器の出土をみており、右岸のあがた遺跡では既出の緑釉段皿のほか昭和55年3月の発掘調査では住居址1および多数の土師器・須恵器・灰釉陶器を検出した。中でも住居址内より金メッキの釵子を1点出土したことは特筆に価する。この他蚕糸試験場、県ケ丘高校、松商学園の各敷地および隣接する北小松地区内でも遺物の出土が多い。また山辺中学校を中心とする下原遺跡では見込みに線描き花文のある黒色土器の碗が出ており、他に荒町・兎川寺・古屋敷・横田・惣社周辺・荒井・大村より土師器を主として須恵器、灰釉陶器の出土をみている。

この時代になると上田にあった信濃国府が松本に移されたといわれているが、その国府所在地が判然とせず、筑摩東遺跡周辺を中心とする筑摩説、松本城周辺とする深志説、惣社を中心とする惣社説、大村廃寺跡等にかかわる大村説などが出されているが、惣社・下の丁・御所前・御所前北など古地名から惣社説をとる考えもある。

参考文献

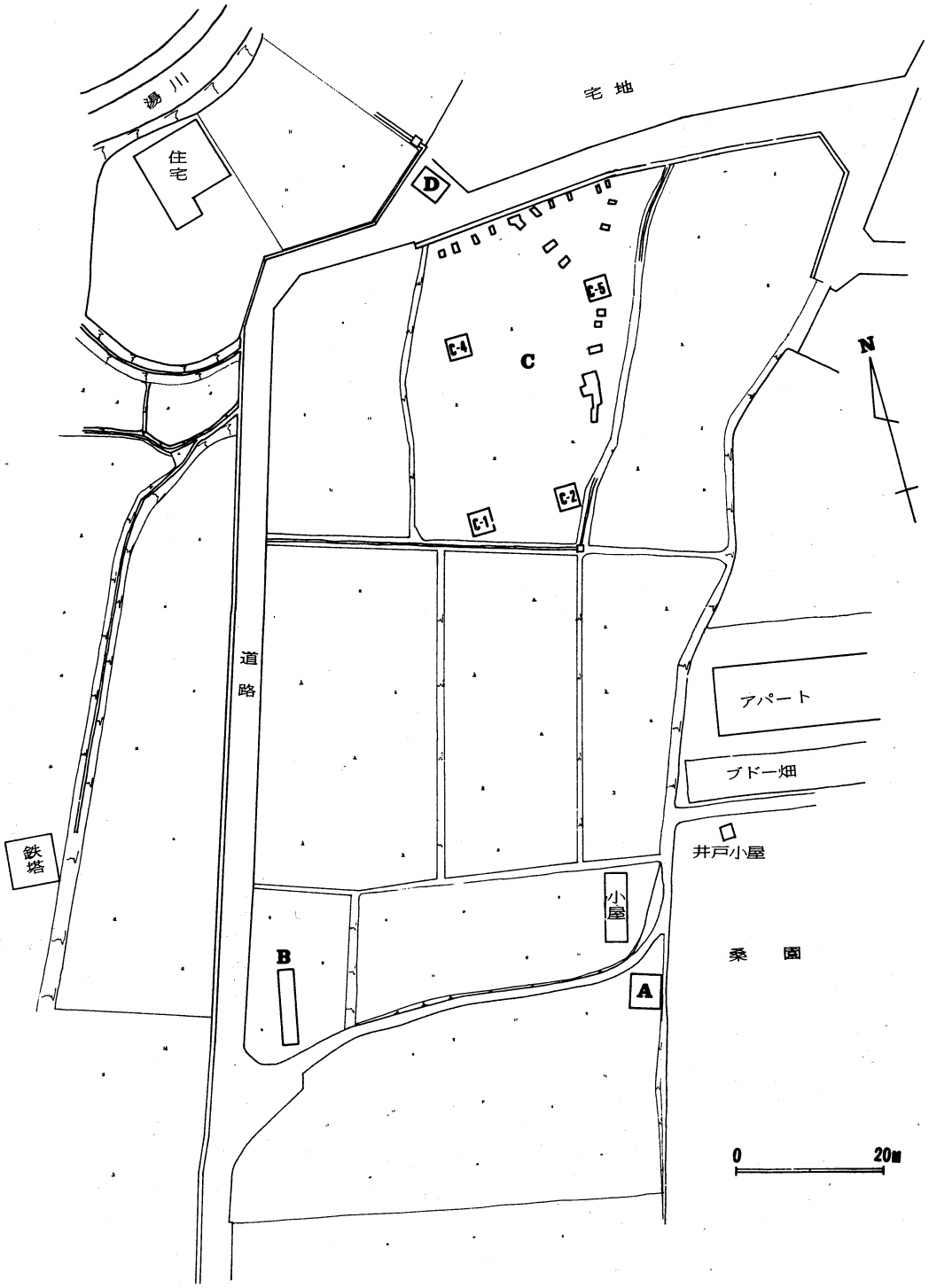
松本市、塩尻市、東筑摩郡誌　自然・歴史上　昭和48年3月同編纂会
あがた遺跡発掘調査報告書　昭和56年3月松本市教委
長野県立松本工業高等学校遺跡緊急発掘報告書　昭和56年3月松本市教委

第3章　遺構、遺物

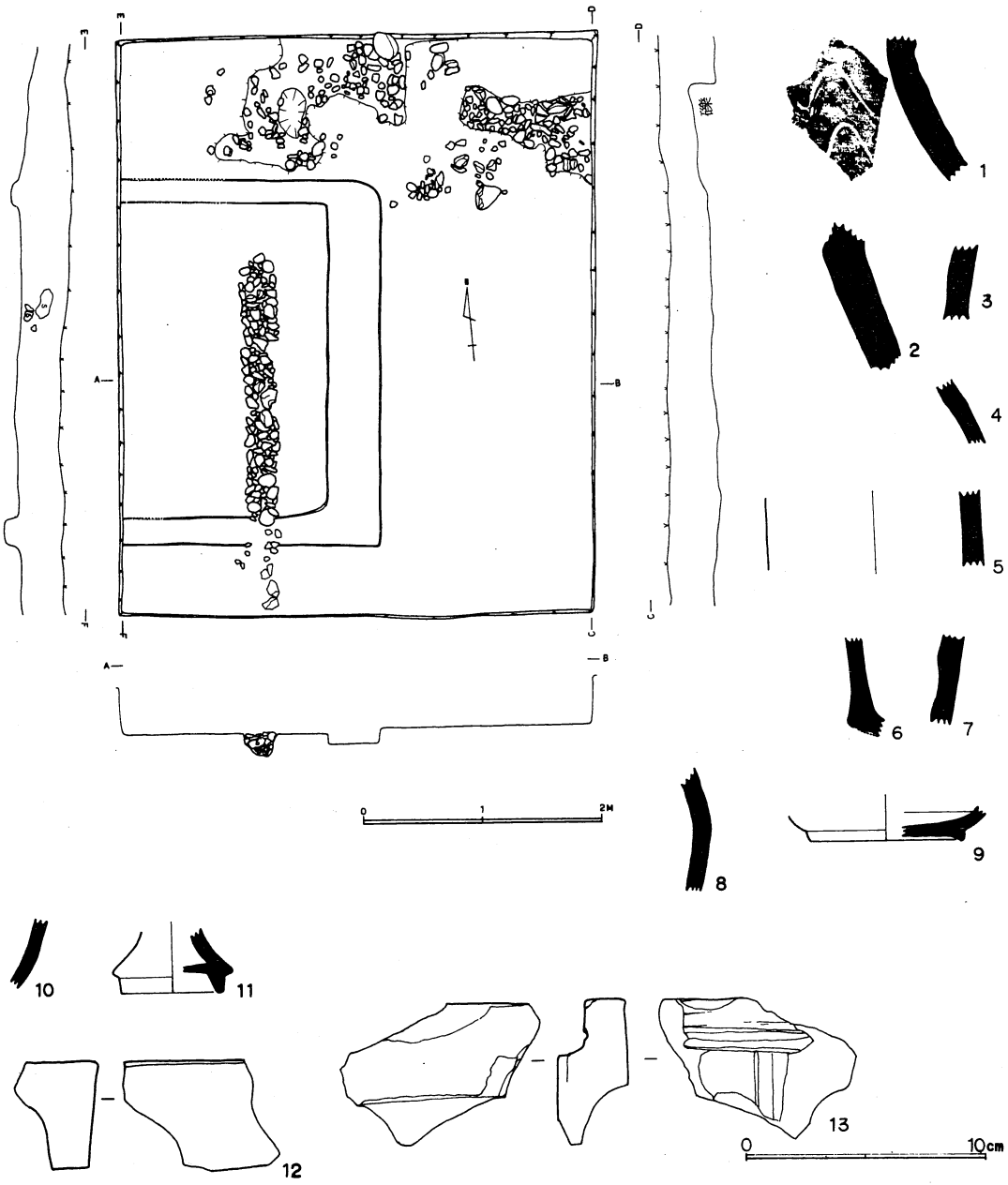
今回調査地区は道路建設予定地を中心にということにより、南北約120m、東西約60mの範囲内にA～Dと4地区に分かれて発掘調査を行った（第2図）。その概要は下記のとおりである。

① **A地区**（第3，4図　図版3，8）

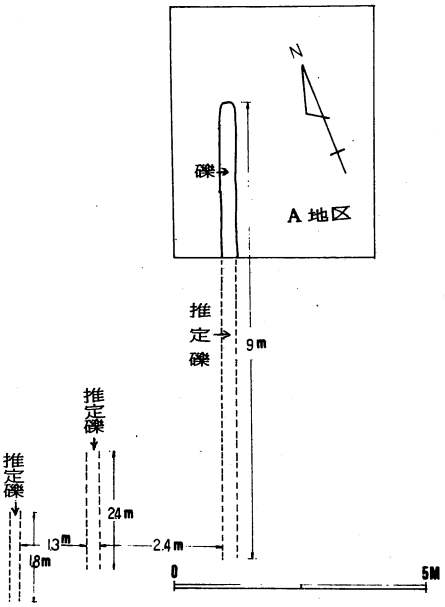
〔**遺構**〕　4×5mのグリットを掘ったところ、－50cmで巾30cm、深さ20cmの礫列があり、ボーリングステッキでグリット南側をさぐったところ、約9mの長さにわたって続き、更に西側にも完全な平行ではないが、南北に2本の礫列を確認した（第4図）。礫は5～15cm大の河原石で無作為



第２図　宮北遺跡調査地点全体図



第３図　宮北遺跡Ａ地区実測図（１：60）および出土遺物実測図（１：３）



第4図　宮北遺跡A地区礫列推定図（1：150）

に入っており、礫中より瓦片が出土した。

この礫列と直交して、コの字型に20～45cm巾で－15cmの浅い溝状落込みがあり、更に北側には、中礫群があり、礫とともに須恵器片、瓦片等が検出された。

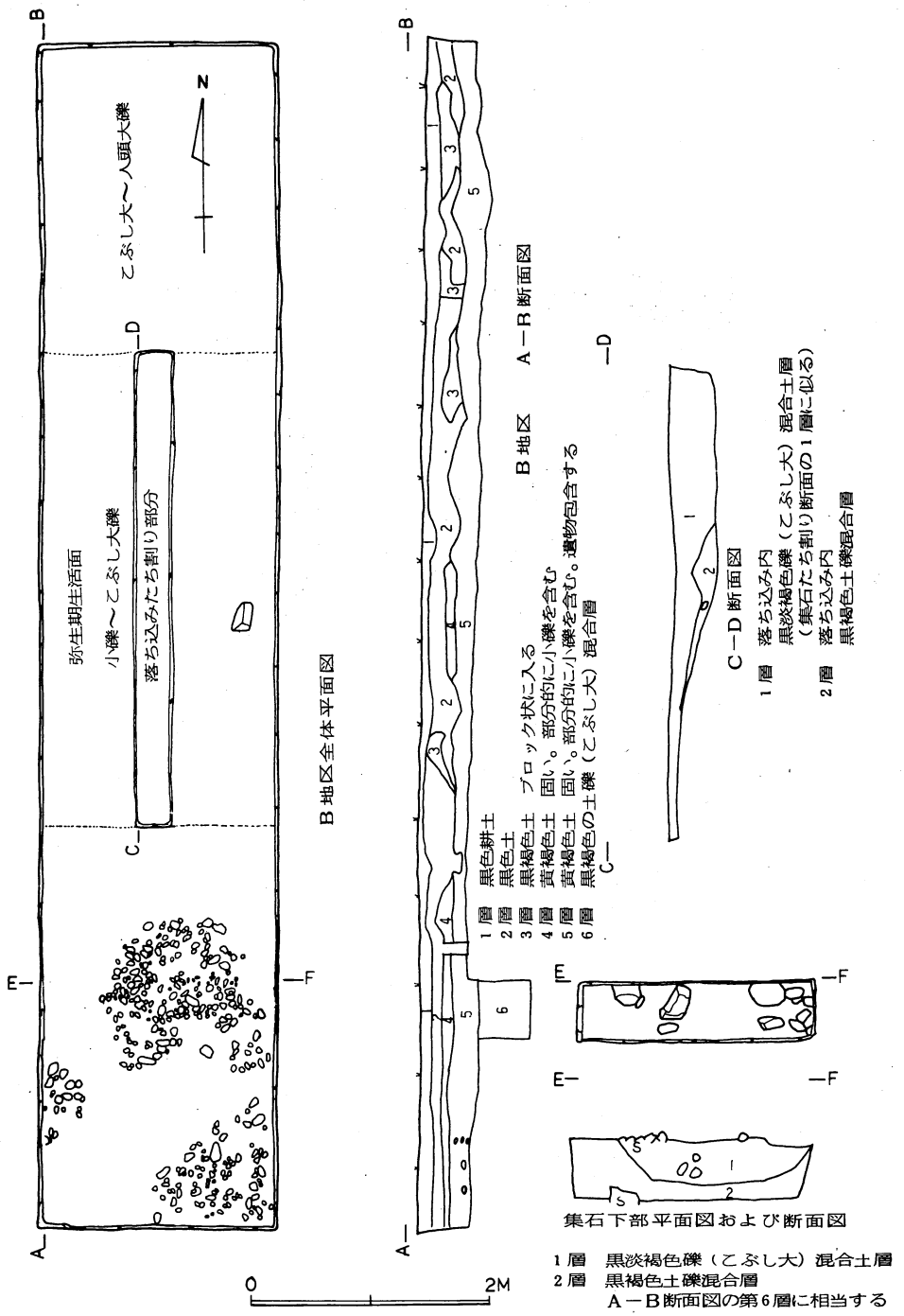
〔**遺物**〕　1.　須恵器。口縁近くで、外側に波状の沈線が描かれている。横に調整痕があり、外面は青灰色の釉が薄くかかっている。内面は指頭による調整痕がある。胎土は微礫を僅かに含む。焼成は堅緻である。　2.　大型甕片で、上部に口縁があったのか、接合部がはげている。横ナデがあり、青灰色の微礫を少し含む。焼成堅緻。　3.　須恵　甕胴部か。横ナデが残る。内外とも灰黒色のやや焼成のやわらかなものである。胎土は良い。　4.　灰釉陶器に似る須恵器で二本の横ナデの細い沈線が残る。調整はやや凹凸のある不整面を残す。焼成良。　5～9は灰釉陶器。　5は頸部か。内外ロクロ整形痕を残す。外面は薄く釉がかかる。胎土は白色で緻密である。　6も頸部破片か。部分的に緑灰色の釉がかかる。　7、8はともに壺胴部か。7は内面に凹凸のロクロ整形痕あり、8は整形時についた段があり、内側に彎曲している。外面は灰白釉がかかっている。9は皿で、回転糸切り痕と、浅い高台であり、内面は有段である。　10は薄い黄茶色の釉の貫入した益子焼の灯明皿片で、胎土はややあらく、焼成はやや柔らかい。　11は瑠璃色の多治見産の線香立てで、釉は厚い。大正初期の手づくりである。　12．列石の中より出土した瓦片で内外面黒色で断面はネズミ色である。厚さは4.3cmの平面で直角に曲り、内側は彎曲する。江戸時代以降に建物の壁材として使われたものと思

われる。　13. 丸瓦で内外面灰黒色。内側に成形時についた溝状のかかりをとっているが、かかり部分が1.5cmと浅い。

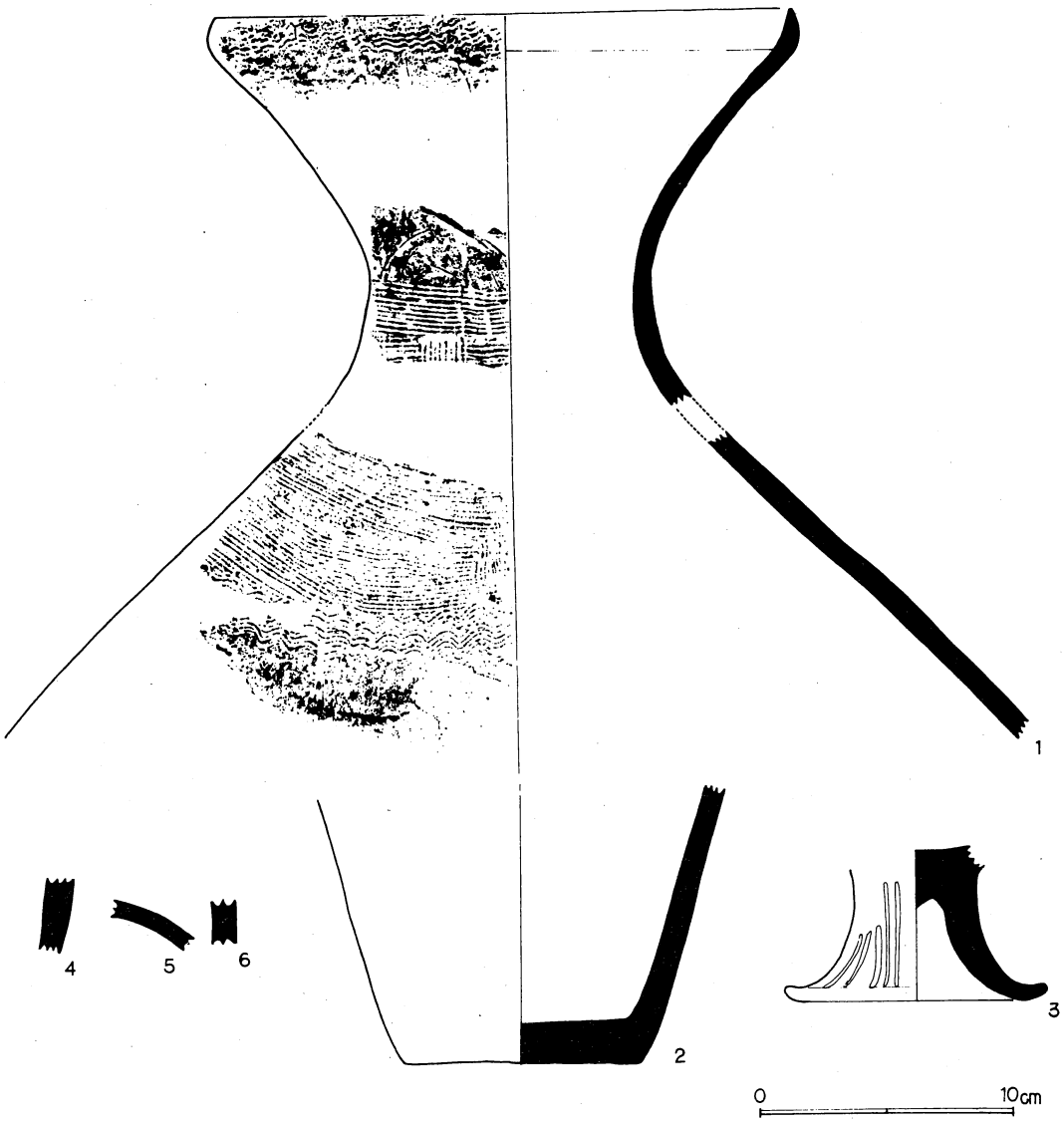
② B地区（第5，6図　図版4,8）

〔遺構〕　A地区の西方45mあまりの地点に南北に長く、10×2mのトレンチを掘ったところ、－25cmで土師内黒の高坏が単独出土。－40cmの黒色土層中に8～30cmの礫が散見。－50cmで弥生後期の壺形土器口縁部出土。弥生時代の住居址範囲は確認できず。他に南側に集石があり、北側には自然堆積の礫がある。

〔遺物〕　1は口径23cmの弥生式土器で、頸部がつよくしまり、胴部が大きくふくらむ壺形土器で、口縁に波状文をめぐらし、頸部には巾2cmの櫛状施文具で簾状文を描いている。頸より肩部にかけては横位の櫛目文をめぐらせ、その下部に波状文をめぐらせている。更に部分的にはJ状に垂下する櫛目文を描いている。下部は無文で、口縁外面には、横に整形した後、縦にヘラみがきがなされ、内面も横にヘラみがきがされている。色調は外面上部はややネズミ色をおびた褐色で下部は黒化しており、内面は全て黒色である。胎土、焼成は良いが器壁がはげたり、小破片になっている部分が多い。最大径は全高の中心より下部にあるものと思われ、箱清水式との関連も考えられるが、地域色のつよいものである。　2. 厚手の土器で1と同時期かと思われるが、胎土に1～3mmもの白石粒が混在して、アバタ状である。胴部は欠失しているが、底より直線的に立上っている。色調は外面黒色及び赤褐色、内面はネズミ色である。　3. 内黒の高坏である。坏部が欠けている。胴が太く短く、脚先は僅かに上反している。坏部は斜めにさしこんである。脚下部には縦のヘラみがきがなされ、赤褐色の微砂粒を含む胎土である。平出における編年に準ずれば第4様式に位置するものと思われる。　4、5は須恵器で、4は甕胴部で外面赤茶色、内面青灰色で、断面をみると、2mm程が青灰色である。内面はよくみがきあげられて滑らかである。胎土はやや小白粒を含む。5は蓋坏かとも思われるもので、内面にはロクロ整形が残り、外面はよく磨かれている。色調は外面灰青色、内面明灰青色、胎土、焼成は良い。　6. 器形は不明であるが、外面薄茶色、内面灰茶色で、内面には、ロクロ整形痕を残す。胎土は灰白色で時期的には平安時代より下るものと思われる。

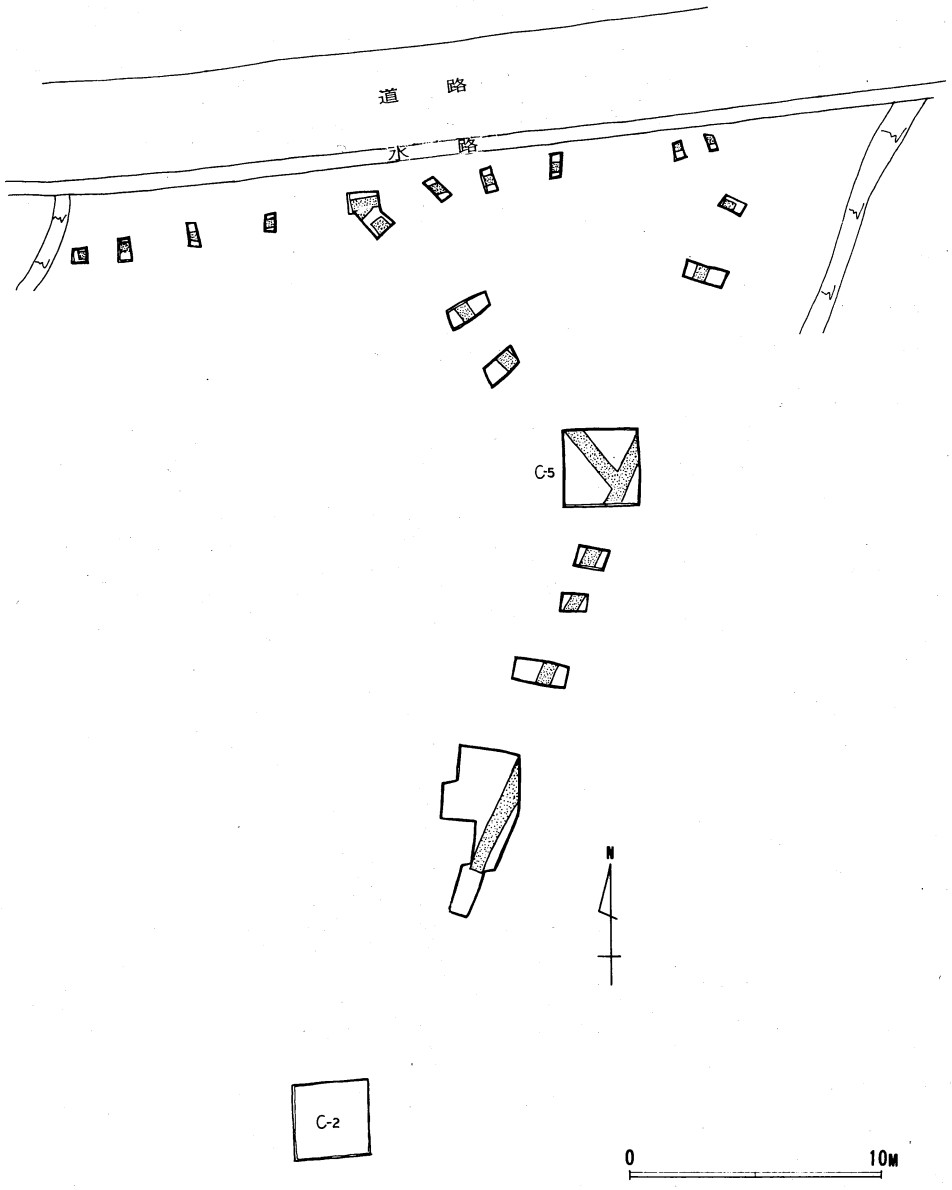


第5図　宮北遺跡B地区全体図、断面図（1：60）



第6図　宮北遺跡B地区出土遺物（1：3）

③　**C地区**（第7～9図　　図版5,8）

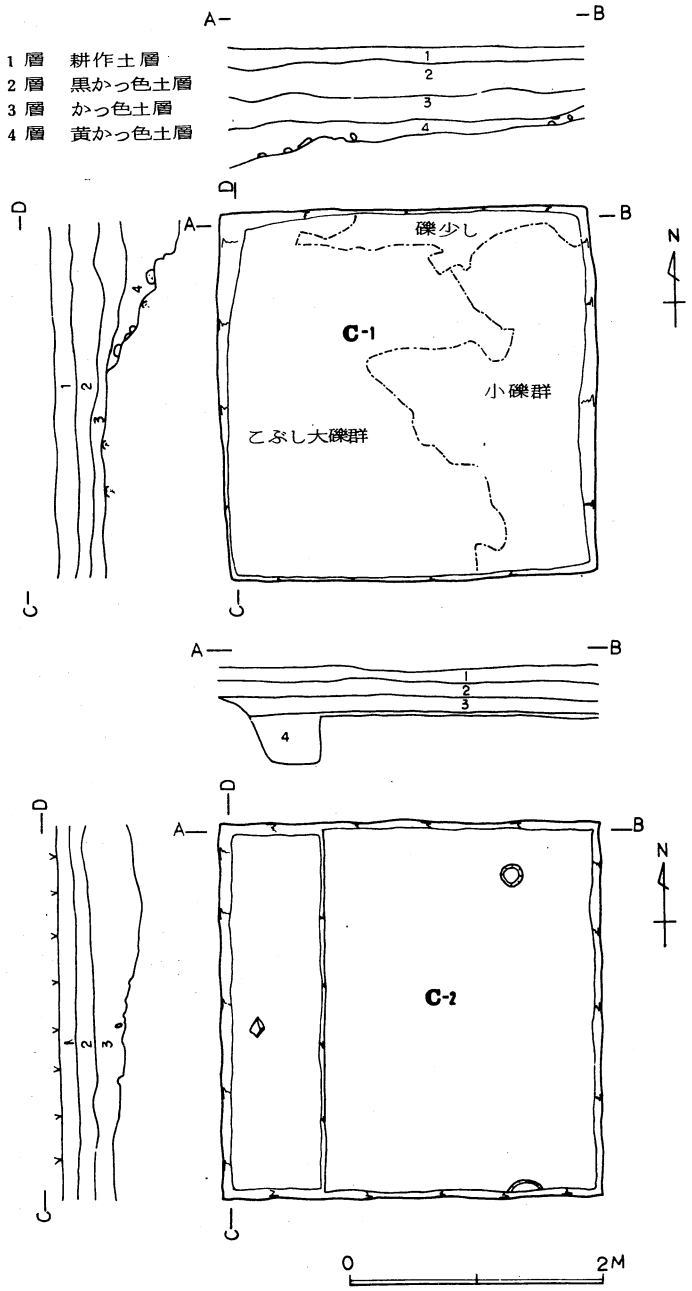


第7図　宮北遺跡C地区礫列遺構平面図（1:300）

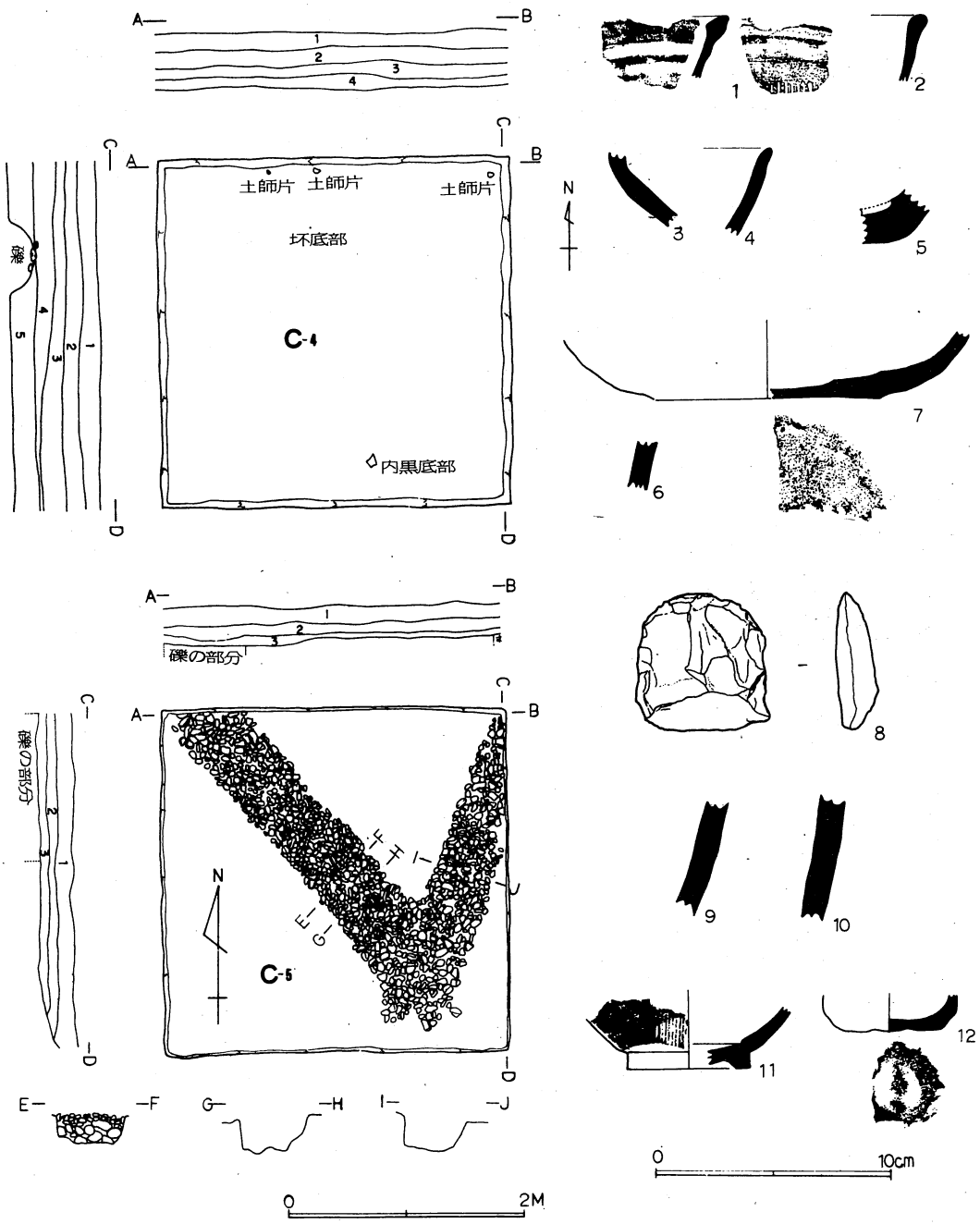
〔遺構〕　3×3mのグリット5ケ所を設定したが、C－5グリットにおいて、V字状の集礫を検出。一部礫の上層に3cmの厚さで粘土がはってあった。礫は巾60cm、こぶし大の礫で25～30cmの深さに埋められ、下部にゆくにしたがって大礫が入っていた。礫中の伴出遺物は、8の打製石斧片、11の青磁破片、12の土師質土器の他、須恵器片など、時期的には一致していない。

この礫の溝状の線は第7図のように水田一帯に広がっており、部分的には接続していないが、南北・東西の線は田圃の畦と平行している。

〔遺物〕　1. C－3出土の小型のスリ鉢で、内面に浅い7本の目があり、外面には2本の太目の沈線がめぐっている。茶褐色の釉で、胎土は、灰白色の柔らかな焼成で、松本平をはじめ各地で昭和期につくられたものである。　2. C－4出土の線香立の口縁部で益子焼である。細かい貫



第8図　宮北遺跡C—1、C—2グリット平面図、断面図（1：60）



第９図　宮北遺跡Ｃ－４、Ｃ－５グリット平面図、
断面図（１：60）および出土遺物実測図（１：３）

入が入り、頸中は上部のみ薄い灰緑色の釉がかかっている。推定口径10cmで胎土は白色、焼成はややわらかである。　3.　C－4出土の須恵器破片で口縁近くか。内面は黒灰色で調整にムラがあるがよく研磨されている。外面は灰色で僅かに釉片がつく。　4もC－4出土で内黒の土師坏である。僅かに外面に段があり胎土もややあらく、焼成もやわらかである。　5もC－4出土の土師坏底部。6もC－4出土の内耳鍋片。　7もC－4出土の内黒の浅い大形の皿か鉢で、底は糸切りで、中央がやや上る。胎土はやや粗く、焼成は柔らかで外面灰茶色、一部赤色、内面は黒色である。平安終り頃のものであろう。　8～12はC－5出土のもので、8は打製石斧。砂岩で現重65g、外面は風化して面がすれている。9は須恵器片で縦のタタキ目がなされている。内面は研磨されている。内外青灰色の胎土にやや砂粒を含む。10は溝状の礫中より出土した須恵質土器で、胎土は黄茶色で、焼成は堅緻である。色調は、外面茶色、内面は黒褐色である。11は礫中より出土したもので、薄い茶色の釉のかかった同安窯系青磁碗で、外面下方には釉がかかっていない。外面には櫛目の文様がある。胎土、焼成ともに良い。12は土師質土器で、礫中より出土したものである。底がややふくらみ、底縁の表面を欠くが、小形の土器である。外面茶褐色、内面茶色で、胎土、焼成は良い。

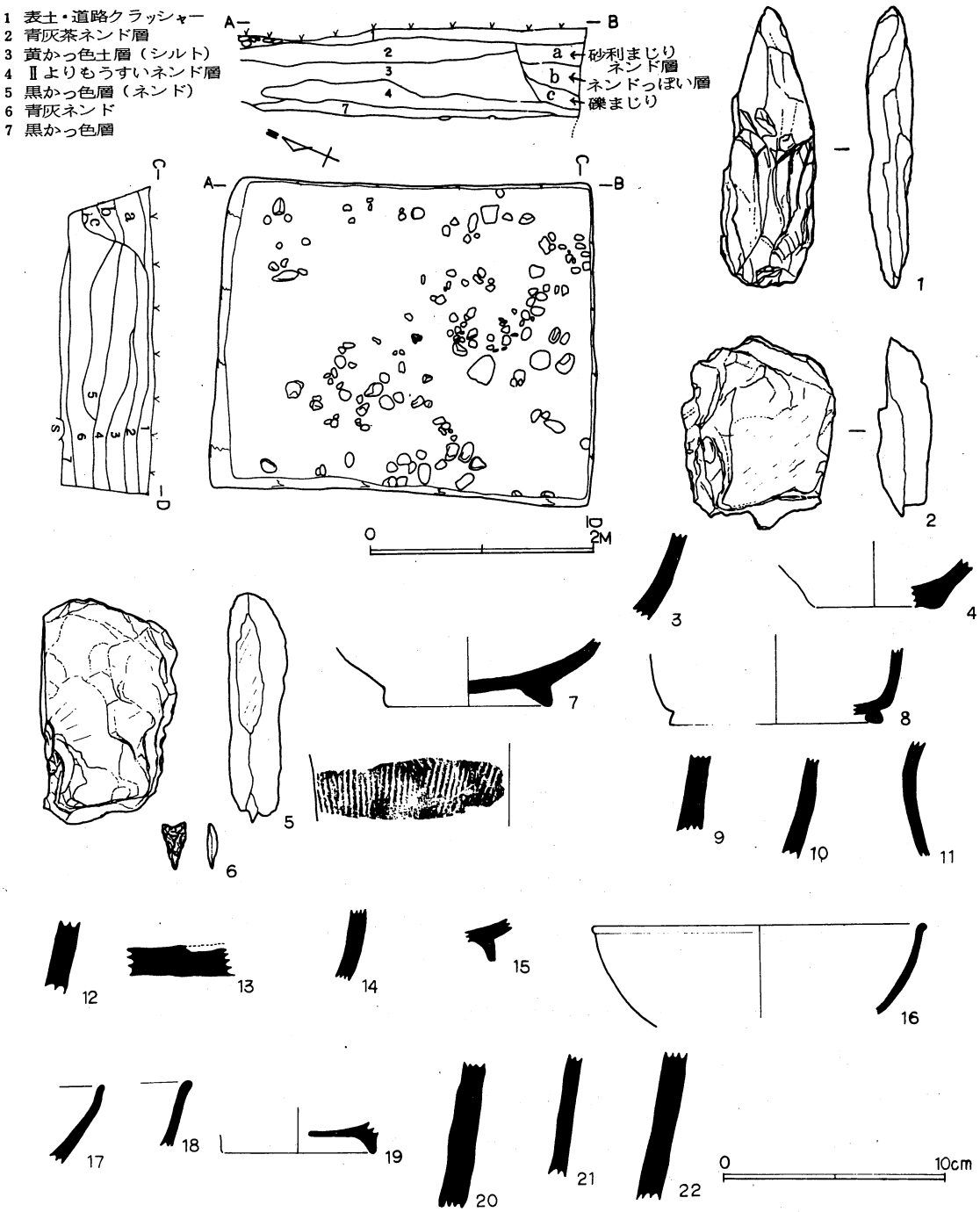
④　**D地区**　（第10図　　図版7,9）

〔**遺構**〕　4×3mのグリットを掘った。以前池のあったところの西端で、現況は道路であるが、池の沈澱物や粘土などは出ず、まだ池に接していないようであった。約80cm下より土師器片などが検出され、その一部からは打製石斧が2点出土したが、遺構はなかった。

〔**遺物**〕　1、2とも硬砂岩の打製石斧で、1は12.5cmで両サイドを打ち欠いた粗形で、110gである。2は前後欠失しているが、片側に剝離があり、現在の重さ190gである。　3は坏体部。4は坏底部で共に土師器である。3、4とも同一胎土で砂利を含む。焼成はよわく、外面赤褐色、内面黒茶色を呈する。

⑤　**表採遺物**（第10図　　図版9）

A地区の東側桑園より表採したもので、縄文時代の石鏃、須恵器、灰釉陶器などが採集されている。5は打製石斧、硬砂岩製、バチ形で切り込み部両面に打痕があり、片側側面は自然面である。刃先はやや磨耗している。6はチャートの石鏃で無茎0.97gである。7は灰釉碗、つけ高台、8は須恵の坏底径9.5cm、つけ高台で腰より直立してゆくもので、胎土、焼成ともによく、平安前期のものと思われる。9は須恵器でタタキ目があり、内面につけたし部分がはみ出している。10は須恵器片。11は須恵長頸瓶・頸部。12は黄茶色のタタキ目文の須恵質土器。13 8須恵の底板部分である。14～21は灰釉で、15は碗底、高台が特に高い。16は碗口縁部、内外に釉がかかり口唇は小さくそっている。17、18



第10図　宮北遺跡D地区平面図、断面図（1：60）およびD地区出土遺物（1～4）、遺跡周辺採集遺物（5～22）実測図（1：3）

も共に口縁部で、17はやや内彎、18は16とともに口唇が外反している。19は碗底部でつけ高台である。20は壺胴部、外面1.3cm巾で調整痕がつき、内面は凹凸のある灰白色の胎土である。21も壺胴部で、外面では釉のタレがあり、釉はあわい緑色である。内面は調整で段がついている。22は須恵の大甕片で太いタタキ目がつく。断面中央は紫茶がかった胎土である。内面は研磨されて滑らかである。

第4章　結　　語

今回調査範囲は僅か100㎡あまりで確たる遺構の検出をみていないので、確定的なことは言えないが、いくつかの考えられる点についてとりあげてみたい。

①　遺構と遺物について

A地区およびC地区における礫列は性格の異なるものと考えられる。

A地区では今まで水田耕作がなされておらず、南北に走る礫列は建造物に付随する犬走り的なものではないかと推定される。しかし、それに伴う柱穴は発見されておらず確定的なことは言い得ない。また礫内より検出された瓦片が明治以降のものらしく、その点、この礫列の設けられた時代決定も新しくなる。ただ上面出土の遺物についてみれば土師器、灰釉陶器など、平安期のものが出土しているので、瓦は後世における混入とも考えられ、あるいは土師、灰釉陶器の時期のものとも推定することはできる。

C地区については開田は明治時代かそれ以前であるらしいが、礫列の広がりと、すぐ北接して湧水池があったという点から推して、水田の暗渠排水ともみえる。松本周辺では湿田改良に古くは粗朶をもって行い、その後、礫をもって行い、更に土管などを利用している。　しかし、暗渠とした場合、東西の列と南北の列が切れている点や、一部ではあるが礫の上部に粘土層のあったことが疑問として残る。

伴出遺物は少ないが、打製石斧、灰釉陶器片、同安窯系の青磁片や土師質土器が検出されているので、この周辺で長期間に亘って生活が営まれていたことを伺わせる。

B地区については弥生、土師器の出土があったが、遺構としてはつかめなかった。しかし、明らかに黒色土層の落込みがあったので、その面が弥生中期の生活面として推定できる。

②　信濃国府推定地説について

信濃国府は現伊和神社を含めて、方8丁にわたるとの惣社説があり、その中心地が今回調査箇所の

東側桑園あたりと推定する考えもあるが、今回調査に関しては、それを裏付ける確たるものはない。ただ桑園も含めて広範囲に亘って土師、須恵、灰釉陶器等が検出されているので、奈良、平安期に生活根拠があったことが推定される。

これらのことにより、今後更に調査を深めれば、何らかの結論を得ることができると思われるが、今回調査はそのための一資料を得たことに意義を認めたい。

なおその後第1図No.27の元屋敷遺跡南周辺で弥生中期末より後期の土器片及び蛤刃状磨石斧片が出土している。

あ　と　が　き

今回調査は日程の都合上、12月半ばより月末までの多忙な折に行われたが、幸い温暖な日に恵まれ、順調に進捗し、当初予期しなかった弥生土器や、性格ははっきりしないが礫列の検出されたことは、今後の調査の一資料として活用されることと思われる。

発掘範囲の狭少ということもあって、少人数での調査ではあったが、中信考古学会・あがた考古会の方々のご協力により無事全うできたことは感謝にたえない。

また、発掘調査をご快諾下さった地主の田中、原両氏のほか、種々ご教示下さった多くの方々に厚くお礼申し上げる。

この調査がきっかけとなって市内の古代史解明と、文化財保護の気運醸成がはかれれば望外の喜びである。

（神沢昌二郎）

惣社車塚立合調査報告

1. 立合調査月日　　昭和56年11月28日（土）　A.M.9.00～

2. 立合調査者　　倉科明正、西沢寿晃、三村　肇、市教委　百瀬清
　　施工業者　積水ハイム

3. 調査経過および結果

11月16日（月）　倉科、西沢、三村、市教委神沢昌二郎の4名により、現地集合したが、工事担当者が不参加のため調査に至らなかった。

11月18日（水）　業者は何ら連絡もなく工事に着手。

11月28日（土）　住宅はほぼ完成していた。為に住宅敷地内のより墳丘に近い部分、住宅の南側、西側を部分的にトレンチをあけ精査した結果、裾野地山面に礎石（葺石）を検出した。しかし石は数箇であるため、積み方は判然としない。この礎石と現況を測量すると、北に開口する前方後方墳のプランが想定できる。

具体的に立合い調査結果としては、住宅建設時には古墳の礎石を壊していないが、宅地内に礎石があることが判明した。　（三村　肇）

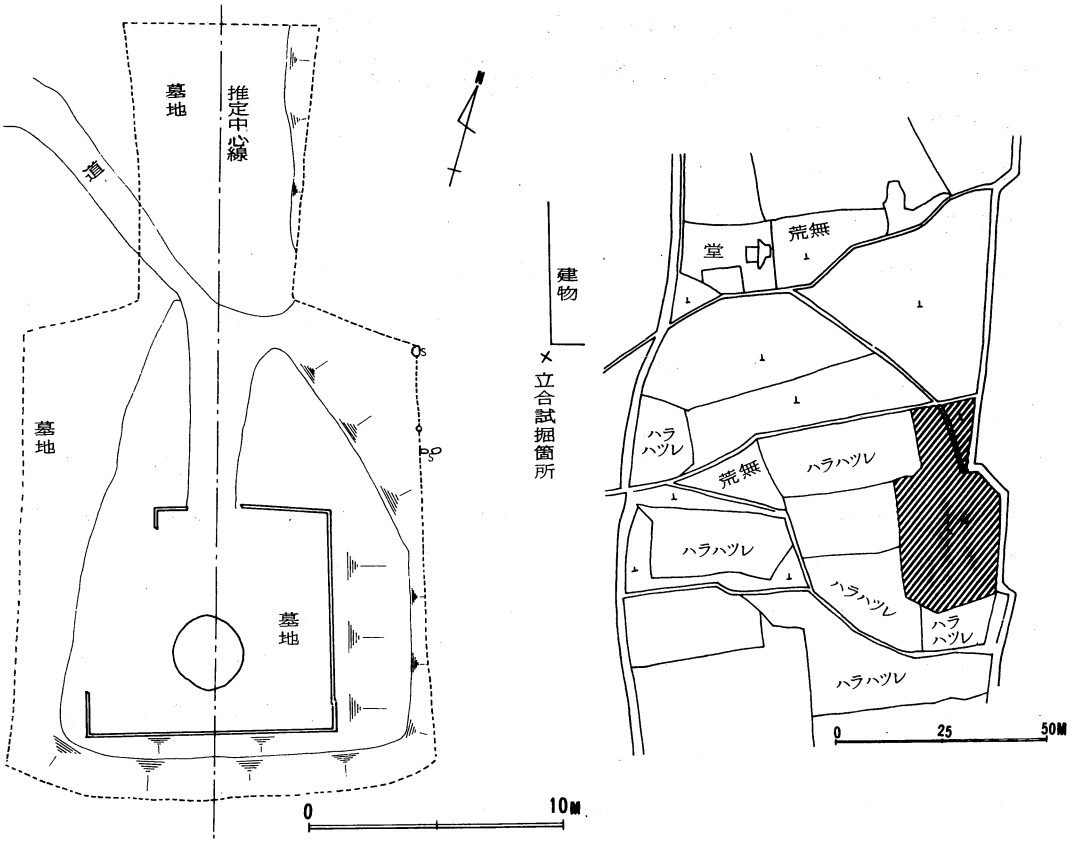
4. 惣社車塚古墳について

惣社車塚古墳は、松本市大字惣社字原452番の1に現存する古墳で、その形態は松本市神田字西仁能田，出川字丸山地籍に築かれた4世紀後半に築造されたと推定されている弘法山古墳と同じ型式に属する前方後方墳である。

惣社車塚古墳の所在する地番は大正13年に3筆に分割されたが、総面積は8畝7歩（823平方メートル）であり、地目は墓地となっており、同地の西原姓らの共同墓地となっている。

この古墳について、その重要性に着目したのは当時東筑摩郡塩尻町堀之内（現塩尻市堀之内）出身で松本市在住の郷土史家であった故堀内千万蔵翁である。

翁は昭和初年松本市の委嘱を受けて松本市史（上・下巻　昭和8年松本市役所刊）の編さん事業に従事中に信濃国の後期国府が倭名類聚抄（931～937）によれば、その当時既に筑摩郡内にあったと記載されているところから、中世には筑摩郡のことを一名国府郡（こくふのこおり）又



第１図　惣社車塚実測図（１：100）および切図（１：600）
（明治初年のもの）

は府中などと呼ばれた松本市周辺にあったものと推考したのである。国府の位置・規模・組織・職制・政治・経済・交通運輸・宗教などを研究する段階で、特に当時は政治と宗教とは一致していたところから、平安時代に入ると各国の国府には必ず附設して建てられた、その国々の中にある大小の神祇の総霊を合せ斎き祀る総社（そうしゃ・そうざ）があった事を確認し、その総社が隣接する東筑摩郡本郷村大字惣社（そうざ）であることを推定したのである。

翁は享保９年（1724）松本藩水野家編集に成る「信府統記」に惣社村　惣社六社大明神とあることに注目し、惣社集落の産土の神である伊和神社こそこれに当るとしたのである。その上更に「元禄十一年寅ノ正月九日　岡田組想（惣）社村道法神社佛閣之覚」（惣社　原儀兵氏所蔵）が発見されて、これには

一、惣社宮六社大明神　此宮坪数六尺＝九尺、高サ弐間壱尺、宮口西むき、村より午方＝当る、此道法村より宮迄六丁弐拾弐間

とあることによって、前記総社と総社を斎き祀る以前より国府の守護神である天・地・東・西・南・北の六箇所神を祀る六所（ろくしょ）又は六社（ろくしゃ）、六社大明神が合せ祀られていることが判明したのである。

これによって国府の範囲確認の調査中に、当時既に半壊となっていた車塚の呼称をもっている古墳を発見したのである。

この推定後期信濃国の国府址の調査結果を史学雑誌である第一次の信濃第六巻第十二号（昭和12年12月15日　信濃郷土研究会発行）に『信濃国府の新検討』と題して発表したのである。

この論文の中で翁は地名考察の項で

「車塚　総社と下金井（現松本市大字里山辺の下金井）の境界線の中程にある。

車塚とは前方後円墳の旧称である。無論国府以前の遺跡である。刀・玉を出したといふ口碑もある。彼奈良京の條坊中にさへ垂仁天皇の御陵があり、美濃国府にも古墳があるから、ここに古墳が在っても差支は無い。因に云ふ、同様の字は此外伊和神社東南荒町地籍にも二箇所あって、封土の一部はまだ遺って居る」と論じているのである。

この車塚については、昭和25年（1950）東筑摩郡本郷村が本郷村誌編さんを計画し、その編さんのための史料調査の段階で「明暦弐申ヨリ元禄十三辰迄　信州筑摩郡岡田組惣社村新切検地帳」（惣社　野口満氏所蔵）が発見され、そのなかの元禄弐己巳年（1689）新切并畑田＝成ル斗代上リの項に

「車塚　下々畑六歩　治兵衛」とあることが確認されたのである。

元禄2年は、水戸藩の徳川光圀が元禄5年（1692）に下野国那須郡湯津上村（現栃木県那須郡湯津上村大字湯津上）にある上車塚と下車塚（著名な前方後方墳で、現在は上侍塚・下侍塚とその名称を替えている）を発掘調査した年より以前にこの惣社の地に前方後方墳（その形態が京都御所へ昇殿する貴族の乗る牛車の形に似ているところから、付けられたものである）が発見されている。

その後筆者は「本郷村文化財調査資料　第一輯　昭和40年7月10日　本郷村文化財審議委員会刊」において

車塚　　惣社字車塚　　惣社と里山辺の下金井との村境にあり、車塚とは前方後円墳の別名にして、中信地方では唯一のもの、直刀・玉類・鏡・甲冑を出土すと言伝へあり

と報告しておいたのである。

その後昭和49年（1974）4月松商学園短期大学がその敷地と予定した松本市大字神田，大字出川地籍にある古墳の発掘調査が中信考古学会の小松虔・大久保知巳・神沢昌二郎・西沢寿晃・倉科明正らの手によって開始されたが、前方後円墳か或いは前方後方墳の可能性が出てきたので発掘調査を一時中止し、これに代って松本市教育委員会の主催により大正大学教授斎藤忠氏を招い

て発掘が再開され、その結果東日本でも古い4世紀後半（西暦350～400）の前方後方墳（全長63ｍ）と認定され、後に国指定史跡となったのである。

（弘法山古墳　昭和53年6月1日　松本市教育委員会刊）

この前方後方墳弘法山古墳の発掘調査によって、惣社の車塚古墳も果然前方後方墳の可能性が増したのである。

昭和56年10月24日松本市教育委員会の依頼を受けて、松本市里山辺湯原字風上り地籍に古墳類似大石群調査の途次中信考古学会の倉科・三村・横田・山越らによって本古墳の確認が行われ、その後明治7年惣社村田畑一筆限地引帳附属の地引絵図（惣社・原儀兵氏所蔵）によって、この車塚古墳が前方部を北に向けた主軸方向凡そ南北の前方後方墳の古墳形態として記載されていることが確認されたのである。

これらによって松本市教育委員会は、この調査を中信考古学会の倉科明正・三村肇・西沢寿晃らに委嘱し、同教育委員会社会教育課文化係の百瀬清氏立会のもとに車塚の範囲確認の一部発掘と共に実測に当ったのである。

その後更に昭和57年2月11日倉科・三村・西沢・横田作重らが市教育委員会の文化係長神沢昌二郎氏立会を得て再度の実測調査を行った結果全長31ｍを数える中信地方では弘法山古墳に次ぐ大きさをもつ前方後方墳と判り、中信地方はもとより長野県の古代史に重要な課題をもつ重要古墳と認めてここに報告する。

なお惣社地籍には、この古墳のほか相当の大きさを持つ円墳の存在が前記した明暦2年より元禄13年迄の惣社村新切検地帳のうち寛文8年（1668）新切の部に満仲（饅頭）塚　下畑壱畝弐拾四歩　又七郎　同所　下畑壱畝三歩　市之丞　合計2畝27歩（286㎡）と見えている。

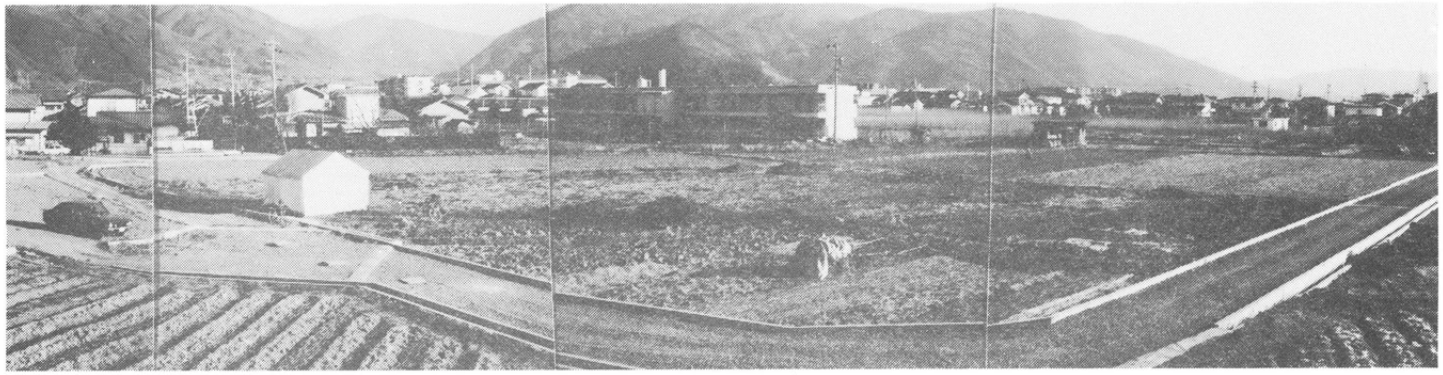
この円墳が前記惣社車塚と如何なる有機的関係にあったかは、現在この位置不明で推定出来難いが、惣社車塚が単独の古墳でなくほかにも古墳があった事を参考に付記しておくものである。

本古墳確認調査をするに当り、貴重な史料を提供して頂いた地元の原儀兵・野口満の両氏を始め、調査に御協力して頂いた関係各位に厚く御礼を申し上げるものである。

（昭和57年2月20日　調査責任者倉科明正）

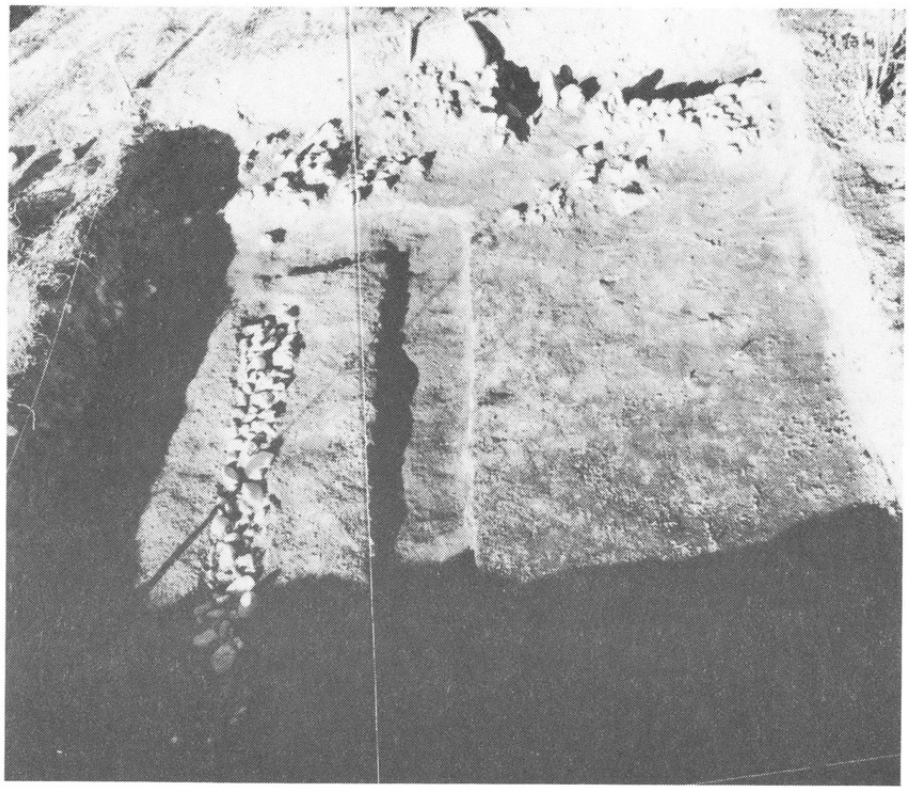
参考文献

「前方後方墳」　茂木雅博　雄山閣　S.49.9

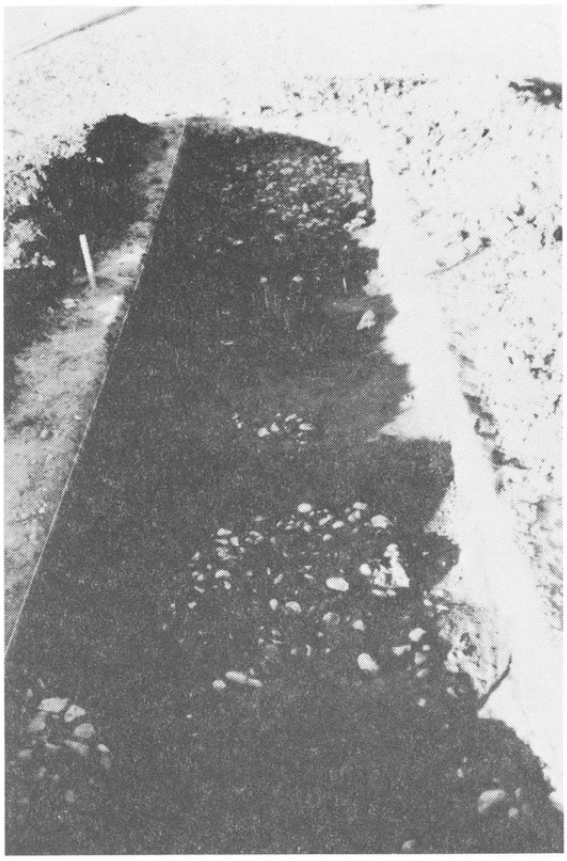


図版１　発掘調査箇所全景（北西より）

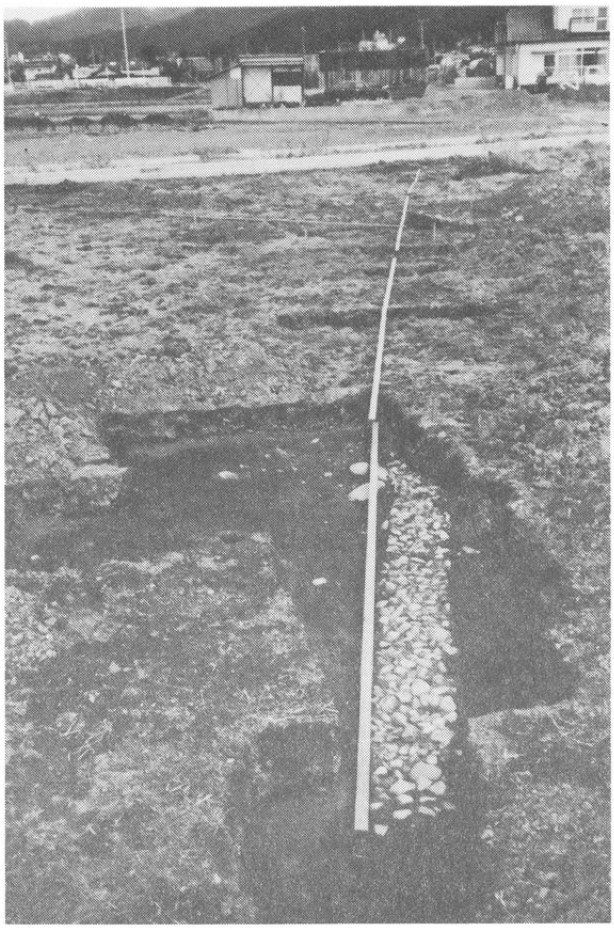
図版２　発掘調査箇所全景（南西より）

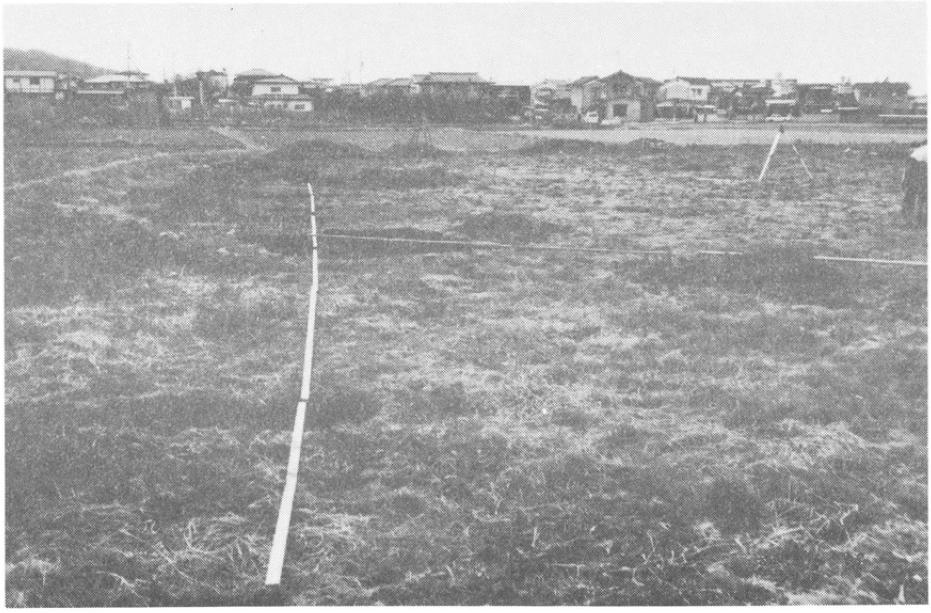


図版３　Ａ地区礫列およびその断面

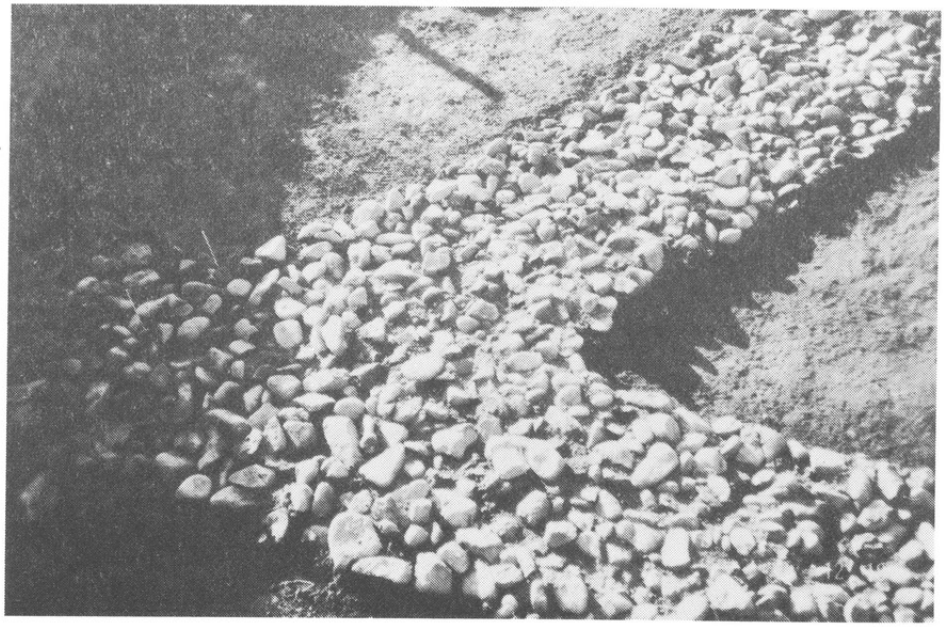


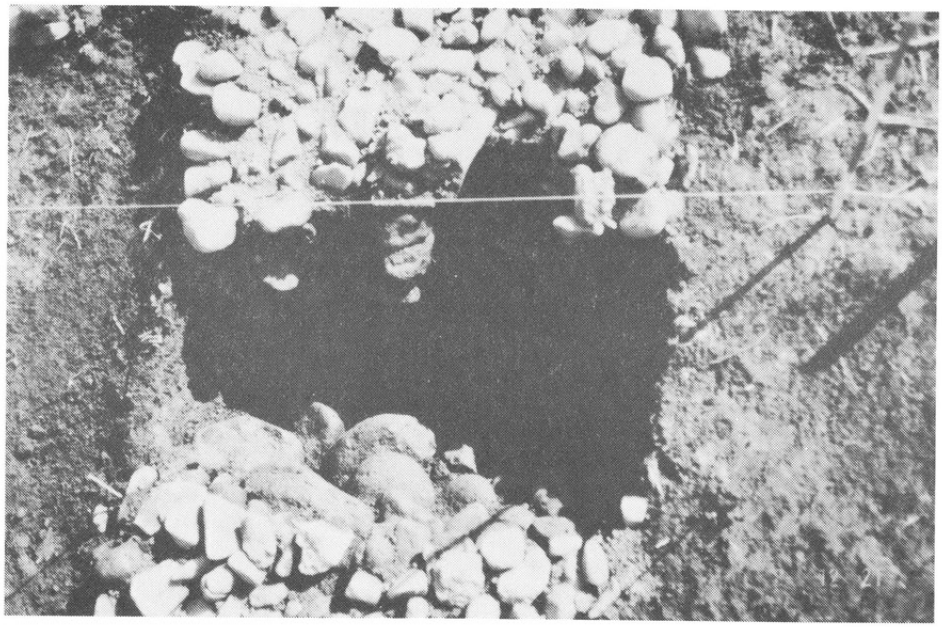
図版4　B地区集石および遺物出土状況



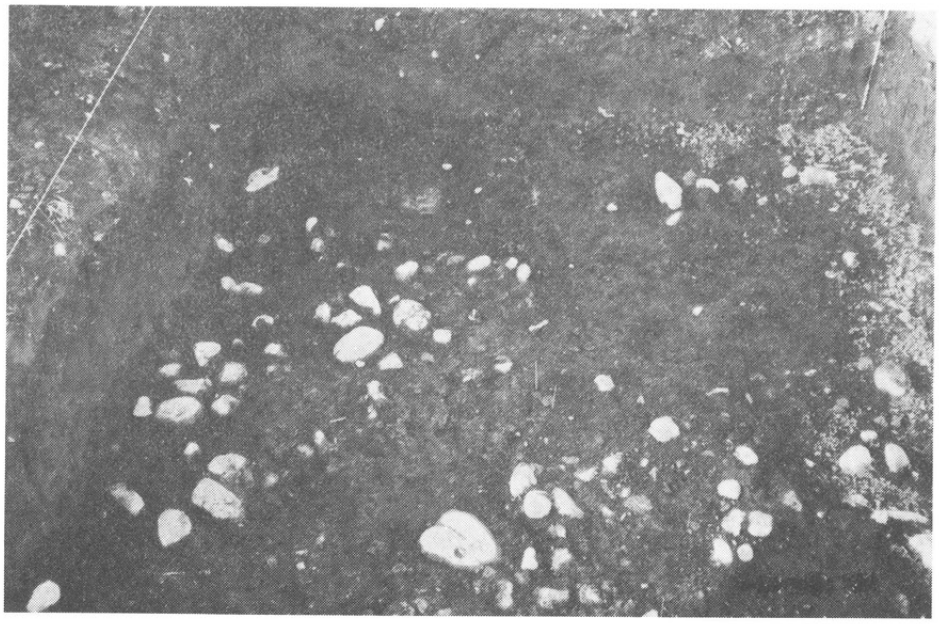


図版５　Ｃ地区礫列（間竿に沿って続いている。上・南より、下・北より）

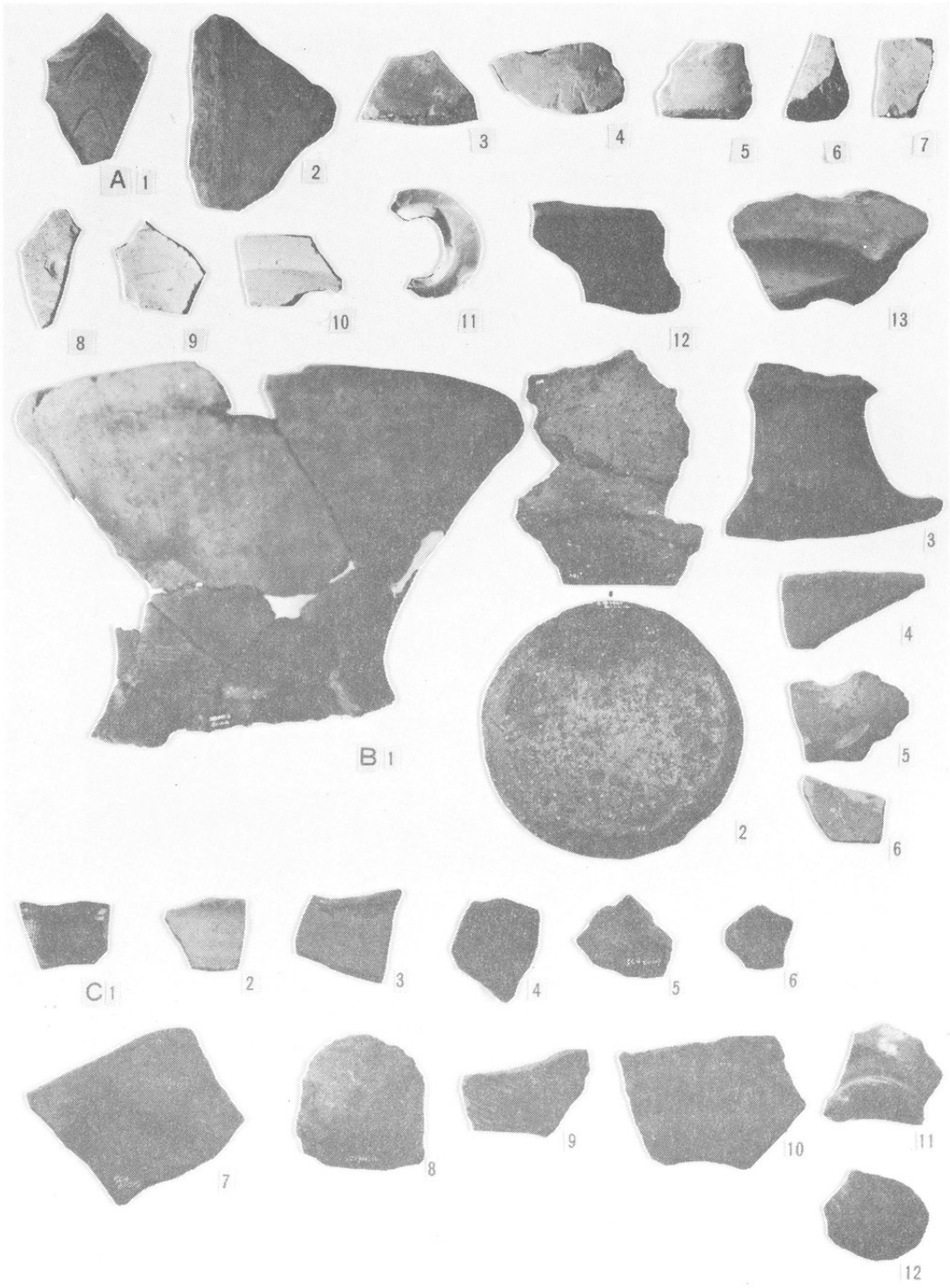




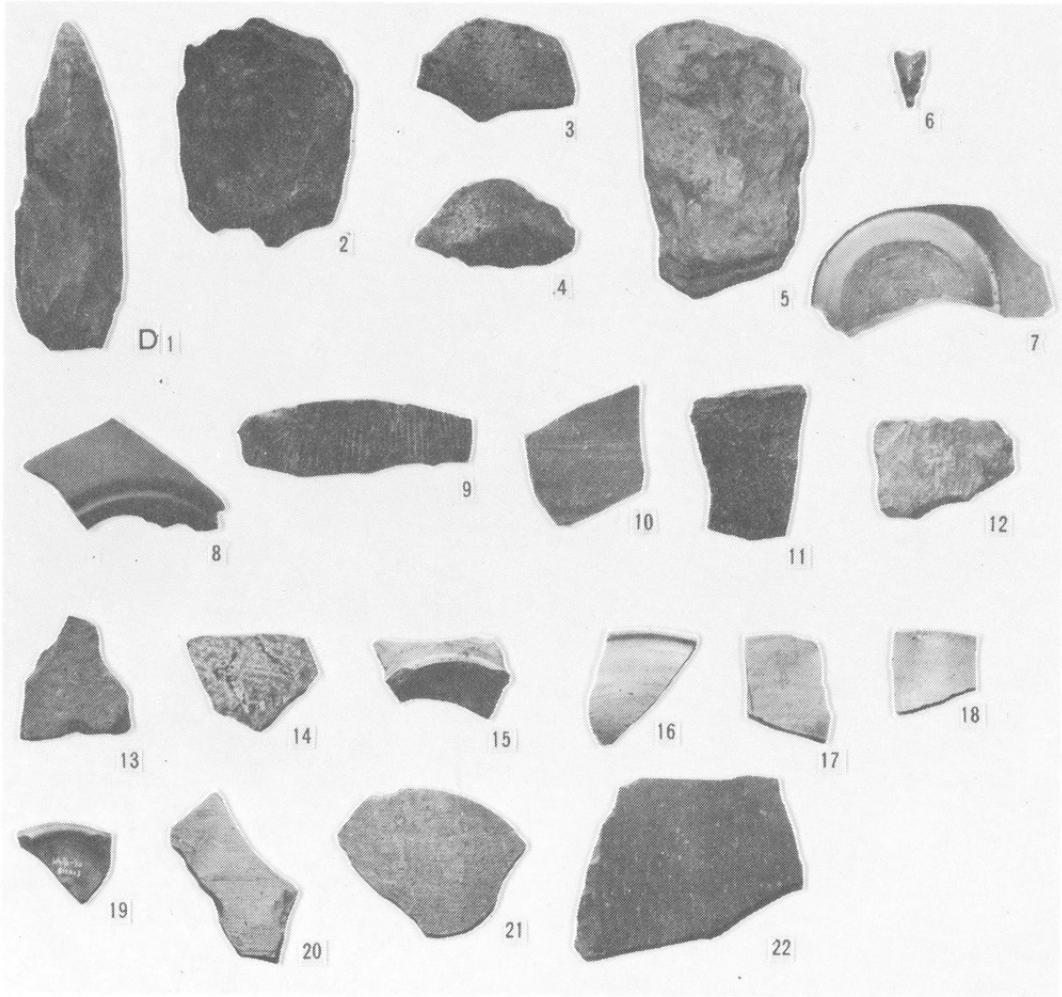
図版６　Ｃ－５グリット礫列及び断面



図版７　Ｄ地区遺物出土状況



図版８　Ａ、Ｂ、Ｃ地区出土遺物
（Ａ地区１～13、Ｂ地区１～６、Ｃ地区１～12）



図版９　Ｄ地区出土遺物および表採遺物
（Ｄ地区１～５、表採６～22 ）

松本市惣社宮北遺跡緊急発掘調査報告書

昭和57年3月21日 印刷
昭和57年3月31日 発行

発　行　　松本市教育委員会
松本市丸の内3番7号

印　刷　　すみれタイプ
松本市開智 2−3−33